

下田歌子研究所シンポジウム

「学祖研究の現在」

開会

伊藤——本日司会を務めさせていただきます、実践女子学園下田歌子研究所主任研究員の伊藤由希子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは開会にあたりまして、実践女子大学学長田島眞よりみなさまに御挨拶申し上げます。

田島——みなさまこんにちは。まもなく師走になるといいたいへんお忙しい中、このように多数の方にお集まりいただき、ありがとうございます。

この下田研究所のシンポジウムは、昨年が続いて二回目になります。本年は「学祖研究の現在」というテーマでのシンポジウムです。いずれも明治時代の偉人、トップリーダーたちを学祖とし

て仰ぐ四大学——日本女子大学、東洋大学、日本大学、実践女子大学というこの四大学で、現在学祖研究をなさっている先生方をお招きして、シンポジウムを開催することになりました。

昨今の大学改革の荒波の中で、私立大学にこそ、学祖研究が非常に重要になっています。建学の精神というものをどのように捉えるのか、現在にどう活かすのか。本学でも昨年、グラントデザイン委員会というものを設けて、あらためて建学の精神を見直すということにいたしました。ところが、これが非常に難しい。なぜ難しいかというと、学祖から直接話を聞くことは、当然できないわけですね。残された書物から類推する以外にないわけです。そうすると解釈ということをせざるを得ないわけですが、人によって解釈が様々で、本来ならば一致団結して実践女子大学を盛り上げようと意図したことなのですが、あにはからんや、意見が相違してしまつて、正直言つて喧嘩腰で激論を闘わせるという羽目になっております。まあそれでもどうにか落ち着くところに落ち着いたんですが、そういうこともあつて、私自身、学祖研究の重要性をひしひしと感じております。本日は示唆に富んだシンポジウムになるのではないかと期待しております。

最後に、シンポジウムを取り仕切つていただいた湯浅所長、伊藤主任研究員に厚く御礼申し上げて、開会の挨拶とさせていただきます。

伊藤——本日のシンポジウムのテーマは「学祖研究の現在」ですが、ここに持つてまいりましたのは、今年の五月に朝日新聞に掲載されました記事です。ここには、「私立大学の原点、それは建学の精神にあります。脈々と受け継がれてきたその志は、大学の個性として今も息づいています」というようなことが書いてあります。ここ数年、このような各大学の紹介記事が新聞や雑誌に掲載されることも多いのですが、なぜ今、さまざまな私立大学が、このように原点としての建学の精神、そして学祖というものを見直して、あらためて立ち返ろうとしているのか。それにはおそらく社会経済構造の変化、少子化やグローバル化によつて、研究教育機関としての大学のあり方や、意義が問われるようになってきていることも、もちろん関係していると思います。また、大学の評価を行っている公益財団法人大学基準協会という組織があります。そこが「大学は、その理念に基づき、人材育成の目的、その他の教育研究上の目的を適切に設定し、公表しなければならぬ」「大学は、その理念・目的をふまえて、適切な教育研究組織を整備しなければならない」など、その大学の理念・目的をはつきりさせることを求めているということも、理由の一つとしてあると思います。ただ、現在のこのような流れというのは、

そういう外からの求めや要請だけでは説明できない面もあるように思います。

下田歌子研究所を昨年四月に立ち上げました目的の一つにも学祖研究ということがあるわけですが、本日のシンポジウムでは各大学で学祖研究を進めてこられた先生方をお招きして、それぞれの大学は学祖研究をどのように進めて、そこから何を学

び、それをどのように現在に活かそうとしているのかという「学祖研究の現在」をめぐる諸問題について考えていきたいと思っております。

それではここから各先生のお話を伺っていきたいと思います。はじめに下田歌子研究所長の湯浅茂雄先生、どうぞよろしくお願いたします。